

ポケット ジャーナル



★講師は一流クリエイター
デザイナー界・写真界の一

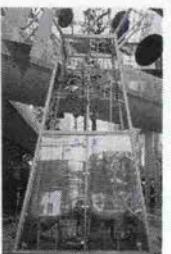
流クリエイターが講師を務
める「神戸クリエイティブ
フォーラム'93」が開催され
る。從来の一方通行型の講
座とは異なるコミュニケーション
重視のセミナー。実

際的なアドバイスが受けら
れる。

◇講師
10月16日 (土) 柴田敏雄・立木義浩
10月23日 (土) 内田繁・菊竹清訓
10月30日 (土) 佐藤見一・田中一光
11月6日 (土) 浅葉克己・タナカノ
リユキ
11月13日 (土) 奥村耕正・山本容子
11月20日 (土) 坂井直樹・松岡正剛
11月27日 (土) 川上元美・松永真
◇時間
午前9時~/午後5時
◇受講料
各講座38000円

◇会場
神戸ハーバーランド二
オータニ
問合せ
鶴サクレ
電 078-366-2220

★「ボールマシン」愛称募集
ボールの永久運動的な動
きのおもしろさが人気の神
戸ハーバーランド・キャナ



ルガーデン内設置のモニュ
メント、通称「ボールマシ
ン」を、市民の方により一
層親しんでいただこうと、
キヤナルガーデンオープン
1周年記念の一環として愛
称が一般募集される。



ちびっ子達によるパレエ

回'93地蔵盆が、神戸港を考
える会(鉄尾三郎代表)メ
リケン地蔵奉賛会(角本稔
代表)の主催で、8月22日
の午後6時より開かれた。

回'93地蔵盆が、神戸港を考
える会(鉄尾三郎代表)メ
リケン地蔵奉賛会(角本稔
代表)の主催で、8月22日
の午後6時より開かれた。

★誕生日ありがとう運動



私の出産った宝宝たち(9)
「かまいやさん」のKさん

「かまいやさん」と呼ばれているKさんは、学園内を取り仕切る
参謀的存在です。
わからることはKさんに聞けば何でも知っている情報でも知
られています。が、時々間違った
お金の管理もきちっとでき、実
習という形で、午前中だけ仕事に
でかけています。
就職できる能力は十分持っている
ますが、家族の人の希望もあり実
習で頂くお給料は貯金し、こづか
い帳もつけています。

とても神経が細やかで、かゆい
ところに手が届くよう気配りが
できます。特に重度の人の介助は、保護者
の人も安心して任せられる程信頼
を得ています。

唯、一つの欠点である「かまい
やさんは、よく気がつきすぎ
て、先、手助けをしてしま
う」とあります。
でもKさんは、あなたから教わる
ことは、いっぱいあります。

これからも今迄通り、「かまい
やさん」と言わ続けても、マイ
ベースで進んで下さい。(N)

誕生日ありがとうございます
TEL 078-360-5050
イビル7F
ダイヤモンド二ッセ
理株式会社 神戸市中央区川崎
町1-7-4
紙飛行機選手権大会
手作りの紙飛行機を飛ば
して滞空時間を競う「第一
回ジャパンカップ全日本紙
飛行機選手権」の予選が8
月から10月にかけて各地域
で行われている。兵庫県で

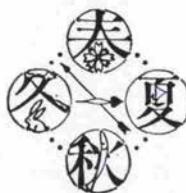
★第7回'93メリケン地蔵盆
ちびっ子達と精霊流し
メリケンパーク東入口に
あるメリケン地蔵の、第7

月の誕生日がとう運動本部
TEL 078-366-2220
神戸国際会館1階郵便局の隣
078-231-2114

す」だけのラジオ界全体の体質を積極的に改善していくと、「ドラマ」「感動」をテーマに新しい番組作りを取り組む。

オープン。3番組をここから発信する。ガラス越しに生放送中のスタジオが見られる、ハーバーランドの新名所になりそうだ。

花時計



いかなる「大空港」に育てるのか
大阪湾の泉州南沖に、いま、着々と「関西国際空港」のプロジェクトが進行中である。いわば、現在開港まであと一年といふところにきている。まさに、世界のハブ空港を心目指す「大空港」が出現

発着できるという画期的な空港である特色を持つ素晴らしいことである。恐らく神戸まで30分で到着できるという、頗つ

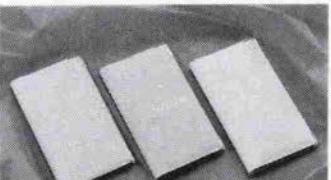
強い連帯を持たねばならない報道機関も大いに取材発信をして貰いたい。
"大空港"のあり方は、市民も責任がある。△△

ト^リ麗^リ文化研究会(30) 12月1日
が、甲麗文化研究会(30) 12月1日
市研究会、共同研究会(30) 12月1日
の阪神世界(30) 12月1日
るシンポジウム。11月15時^ト 甲子園会館

神戸が舞台の切なく熱い
オリジナルラブストーリー
を毎日午後8時から9時の
1時間枠でオンエア。リス
ナーから寄せられる恋にま
つわる悩みやメッセージを
からめ、日本でたったひとつ
つ、ドラマのKiss-F
Mを打ち出す。また10月1
日にはハーバーランドのキ
ヤナルガーデンにサテライ
トスタジオ「マリスター」を

★日経レディスダイアリー
"カシア"をプレゼント!
日本経済新聞では京阪神の大
のO.L.をメインテーマゲット
にしたレディスダイアリー
を作った。今回で5冊目。
毎回500人以上のアンケート
調査に基づき、機能性、デ
ザイン、情報量などが見直
されており、新聞社らしい
盛りだくさんの情報（京阪
神の情報が中心）が特徴。

先着100名様にプレゼントし
ます。



ベージュ、ブルー、ピンクの3色が揃う

OKOBIE POST

★10月4日より“アーバンリゾートフェア神戸”の事務局が移転
■651 中央区雲井通5丁目1番1号
神戸市中央区総合庁舎9階
322-1

5996 (代表)

アーバンリゾーナの事務局が移転
通5丁目1番1号
合庁舎9階 322-1

★株式会社新潟汽船の新潟汽船取締役相談役・元日本ゴルフ協会会長が9月10日肝不全のため生前病院死去。海運業、ゴルフ、茶道など幅広く活躍。現・日本ゴルフ協会会長。10月19日午後2時から

★琵琶演奏家の上原まりさんの事務所が移転。柳上原まり事務所 107 東京都港区赤坂9-6-28 802

上原まり 審 03-3408-3733
★ルイ・ヴィトンジャパン神戸
（大曾昌子店長）が、10周年手を取

（大豊昌子局長）が、1局全不連
え、10月19日午後7時より、バト
リック・ルイ・ヴィトンを囲むタ
ン

★学校法人須磨学園理事の足立淑さん（故足立巻一氏夫人・77歳）
へを開催

が、九月二十九日に他界された。葬儀は三十日（木）の正午、花隈の福德寺で。ご冥福をお祈り致し

★第6回ルネサンスの会'93作品
展が10月4日(木)~19日(火)半
夜

當 332 — 4 8 7 7
辰が1月1日(木)から1月16日(火)まで開催されます。

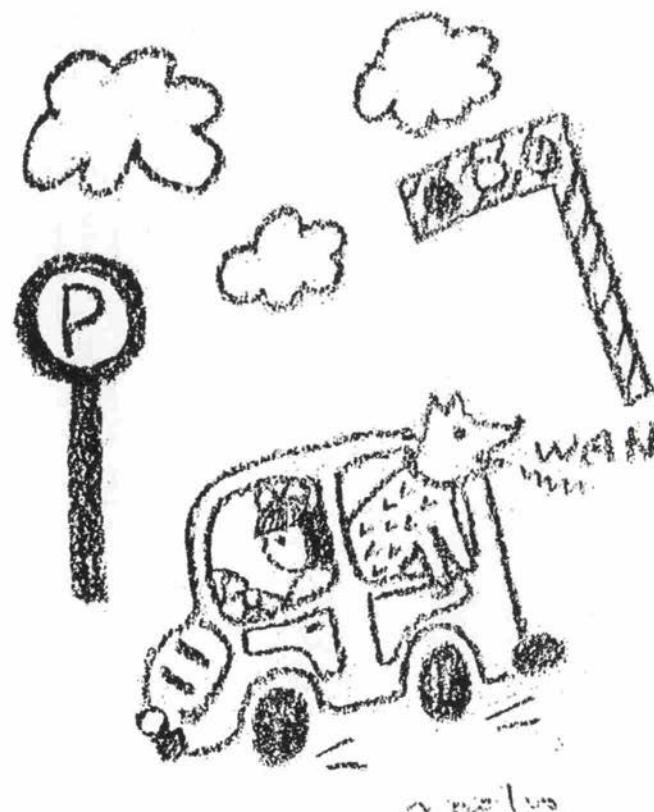
★第19回愛の手バザー（里親運動をすすめるための）が、10月27日（水）午前10時～午後3時迄／神

戸市立婦人会館 4F つばき・もく
れん・すみれ 5F さくらで開催。
(品物の提供は10月中旬迄) お問

合せ／家庭養護促進協会（中央区
橘通3丁目4-1 総合福祉センタ
12F (341) 5046

★甲龍文化研究会の阪神間サミット（仮）△地域を越えた阪神間▽が、甲龍文化研究会、阪急沿線都

市研究会、共同研究（1930年
の阪神世界）の三つの研究会によ
るシンポジウム。11月3日午後1
時5時／甲子園会館



ビジネスに!
ショッピングに!
ご利用ください



磯上モーターパーク
(神戸国際会館前) TEL (078) 251-2662 (8:00A.M.~11:00P.M.)

- 収容台数 350台
- 月極駐車可
- 年中無休

神戸の山里は民俗文化の宝庫

田辺 真人

（園田学園女子短期大学助教授）

写真／池田 年夫

港町神戸は、やはり「海」のイメージが強い。しかし、神戸の市域は約五五〇平方キロもあって、例えば約二二平方キロの大阪市と比べても、二倍以上の広さを持っている。そこで、この広い市域の中には、六甲山地の南側の旧市街地のような海沿いの地域とは、違った世界もある。今回は神戸のいわば山里をたどってみたい。

神戸の中心三ノ宮は、新神戸トンネルを通る三〇分足らずのドライブで典型的な神戸の山里「北区山田町」に直結している。今回のルポではこの山田の里よりさらにもう一つ山を越えた北側を訪ねよう。

新神戸トンネルを通り、篠谷に出、山田川を下って衝原を過ぎると、呑吐ダムでできた人造湖の脇で車は神戸と三木との市境を越える。これがおおむね古来の摂津・播磨の国境線であった。もう少し川を下ると、三木市御坂で山田川は北東から来る淡河川と合流し、ここから西は志染（しじみ）川と呼ばれる。『播磨國風土記』に履中天皇が来られた時にここで食事をされたところ、食事の箱に蜋貝が這い上ったので「シジミ」と名づけられたと記す古い地名である。

神戸市からは離れるが、志染川を少し下ると、谷筋がやや開け「大谷」と呼ばれる土地があり、川の北の丘陵地の奥に山伏の寺として知られる伽耶院がある。播磨・摂津の各地に多くの寺を創建したという伝説的な法道仙人が、大化元年に創建したという伽耶院は平安時代に堂



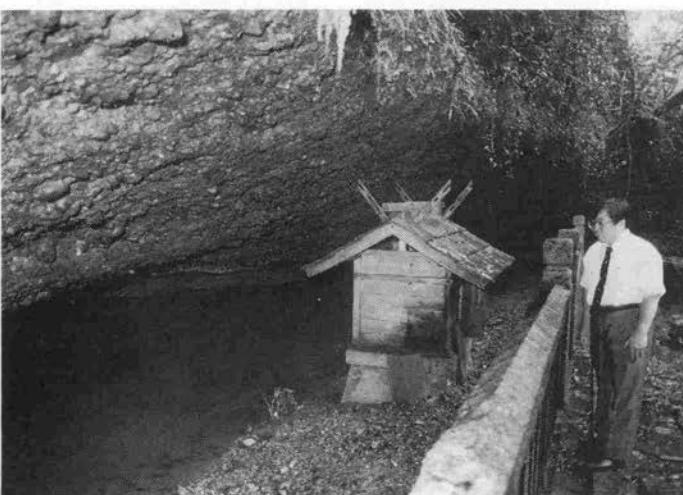
10月10日、伽耶院の境内には多くの山伏衆が集まる

宇數十僧坊百三十余と伝えられるほど繁栄したが、慶長一四年（一六〇九）羽柴秀吉の三木城攻撃に際して焼き打ちに合い衰退。江戸時代になって諸大名の援助で再建され、天和元年（一六八一）十月十日に後西天皇から伽耶院の号を賜った。これを記念して毎年十月十日に大護摩の供養が催される。近畿一円から参集した百人以上の山伏が繰り広げるこの行事は参加した人々に深い感銘を与える。きらびやかな衣装の修験者たちによる山伏問答

に始まり四方鎮め・大護摩によって境内一帯に立ちこめるミルク色の煙など、この日の体験で民俗学を志したという若者もいるほどである。

伽耶院からもの志染川にもどって川を南に渡ると、道端に「ドッコイさん」と呼ばれる不思議な石像がある。大きな石の表面に六体の人形のような像と数十体の小さな人形が線彫りされている。考古学的には、そこにある古墳の石室の石材に素朴に彫られた六地蔵だろうと考えられているが、中にはUFOや、宇宙人に結びつける人があるほどに、奇妙な石造遺品である。

ドッコイさんから一キロも東に歩くと、なだらかな丘陵の麓の窪地に「志染の石窟（しじみのいわや）」がある。これも『播磨国風土記』や『古事記』に記される古い洞穴である。記紀によると皇位継承の争いで第二代



岩屋金水としても知られる志染の岩屋
線彫りの不思議なドッコイさん
文化4年の御坂神社能舞台の棟札



山田川と淡河川の合流点に鎮座するのが御坂神社で、平安時代の延喜式に載る古社である。境内には文化4年（一八〇七）再建という棟札を持つ能舞台がある。全国の農山村に分布する農村舞台は、村の鎮守の境内に建られた庶民の芸能の場で、兵庫県は全国的に知られる農村舞台の分布する県だ。神戸市北区の山田町などはかつて「十三の村々に合計一四棟の歌舞伎舞台があったほどである。このように一般的には農村部には歌舞伎の舞台が分布す

雄略天皇に父親・市辺の皇子を殺された億計（おけ）皇子と弘計（をけ）皇子は大和から志染の地に逃れ、この岩屋に隠生して、忍海部（おしうみべ）の細目（いとめ）という土地の豪族のところに仕えていたという。後に身分が明らかになるが、その時すでに雄略は亡く、時の二代清寧天皇には跡継ぎが無かつたので、大和に招き返された二三代顯宗（弘計）二四代仁賢（億計）天皇となつたという。神戸市西区の押部谷や三木市志染の細目など中央の記録に符合する地名が近在にあり、この二皇子淹留の説話は極めて興味深い。皇子が隠生したという志染の石窟はいつ訪ねても常ならぬ雰囲気である。白煙流れる伽耶院の境内・奇妙なドッコイさんの彫刻・静まり返る洞穴のたたずまいなど、神戸市域を一歩離れた東播の一画に、不思議な気配の漂う志染大谷の里である。



るのだが、加古川と明石川の流域を中心として、県内には能舞台の大きな分布圏が認められる。御坂神社の舞台もこのようない点から民俗芸能研究の上で注目される。

御坂から今度は山田川と別れて淡河川をさかのぼろう。淡河は、神戸の市街から北の六甲山地を越えた山田から、もうひとつ北の丹生・帝釈山系を越えた山間の地である。

小さな盆地状の淡河は、伝説によると、太古ひとつの大湖であったという。宝亀一一年(七八〇)湖岸に住んでいた国次左衛門が、下流の堤になつているところを切り、湖水を流しさつたために湖底が現れて盆地になつたのだという。水が退いた後人々はかつて湖で最も深かつた二か所に新たな大地の鎮守——八幡神社と歳田神社——を祭つたという。この淡河勝尾の八幡神社では、毎年二月一七日の「お弓の神事」がある。これは年の初めに悪鬼退散を願う行事で、鳥居の下に「鬼」と書いた的を置き四名の氏子が矢を放つ。厳格な作法は古態をとどめており、県の無形民俗文化財に指定されている。一方八月一六日の夜この神社の境内では、かつては広く播磨を風靡した播州音頭による盆踊りが今でも素朴に続けられている。

やガタロがいると伝えられてきた。大昔、天竺から法道仙人が仏教を広めようとして、紫の雲に乗り龍や鬼神に囲まれて日本に飛来し、淡河の上を通りかかる、この滝を訪ねた。この時、仙人は「曇り滝おきつ白浪白砂の丹生山(にうやま)めぐる水は泡河」という歌を作つて、滝の横の岩壁に刻んだという。滝を見下ろす岩場の上に祀られている瀧宮大神と不動明王や、法道仙人にまつわる伝説などからして、この滝は民間信仰の行場で、曇が滝という名も元来は「籠もり」が滝であったかと思われる。

この法道仙人によつて、白雉二年(六五一)に開かれたとする淡河の名刹が岩嶺山石峯寺で、全盛期の鎌倉時代には四七の塔頭・支院を数えたといつ。国の重要文化財である薬師堂や三重の塔のほか石峯寺には多くの文化財がある。

北僧尾の農村歌舞伎舞台も淡河の重要な文化遺産である。これは、柱に残る墨書から安永六年(一七七七)の建立と現存する年代のわかる、日本最古の農村歌舞伎舞台なのである。

このように文化財の多い淡河の谷をさかのぼつて東に峠を越えると、神戸市で最も北東、八多・大沢・長尾の一角。今日の最後の文化遺産として、日西原にある淵上家住宅を訪ねたい。室町時代、播州の赤松氏の家臣であったが、主家と共に嘉吉の変に荷担して幕府から追われる



勝尾八幡神社のお弓の行事



御坂神社の能舞台



淵上家の住宅に残る古いおクドウさん

社を後に川をさかのぼれば、淡河の中心・淡河本町。その南西の丘陵は淡河城跡で、今でも天守台址や堀が遺つてゐる。鎌倉時代から戦国時代までの城主・淡河氏は、三木城攻撃の羽柴秀吉によつて、天正七年(一五七九)に滅ぼされ、淡河城下は秀吉の支配を受けた後、有馬氏に与えられ、慶長六年(一六〇一)有馬氏が三田城に移るまで一時は有馬氏の美嚢郡支配の本拠として一六世紀末全盛期を迎えた。その後、淡河城は江戸幕府の一国一城令によつて廢され淡河は静かな農村となつたわけである。

淡河川をさらにさかのぼると、東畑の村はずれに景勝・曇(くもり)が滝がある。穏やかな淡河川随一のこの滝は古くから靈場として信仰を集め、滝壺には、黄金の蟹

こととなり、この地に隠生した
二階正友が同家の祖だと伝えてい
る。やがて日西原村の庄屋とな
り、一時は近在の大庄屋を勤めて
三田藩主から今の姓を与えた
という淵上家には、慶長一八年
(一六一三)の検地帳以下八〇一
点の古文書が保存されている。そ
の住宅は、文化三、四年(一八〇
六、七)ころの建築と伝える豪壯
な屋敷で、本年の神戸建築百選'93
の特別賞を獲得した。

新しい観光地フルーツ・フラワ
ー・パークのすぐ近くに、対照的
な近世の民家建築を訪ねて、神戸
の山里探訪の旅を終えたが、六甲
山地のはるか北方の市域に遺る豊
かな民俗文化財に感嘆する一日で
あつた。



淵上邸は美しい石垣に支えられている



神戸建築百選'93「特別賞」に選ばれた淵上住宅の前で
淵上邸夫妻と筆者

一大事

平井 彩花 絵／大橋 良三

(その五)

中村忠介は、その夜も、かなり遅くに帰宅した。忠介は役目で無い事でも頼まれれば引受け、手隙の時には同僚と一献傾け、運が良ければ上役の御相伴をすることもあって、この頃では早くに帰宅する事が稀であった。そういった事が、今日の自分の地位を支えてい

るのだと想つてゐるので、別にそれが苦になる事もなかつたし、むしろ早く帰宅した時は、何か手持ち無沙汰で忘れ物をしたような心地になつて落ち着かない。

今日は、帰りにまたバッタリと奉行の下山と出会つて、たいそう珍しい事に相伴にあずかり、その上、下山はひどく機嫌が良いらしく、話の合間に中村の評判が良く役が上がりそうな事を漏らしてくれた。

小躍りせんばかりの忠介は初め、妻が気鬱そうにしているのに気が付かなかつた。

着替えの終わつたのを見すまして、妻が声を潜めて、女手一つで壯之助ら子供を育ててゐる忠介の妹が來て、事を告げた。すぐには何の用事か思い浮かばない。しかしかなり夜も更けてゐるのに待つてゐると言つた。

「何の用事か全然言わないので。妻女は首を振つた。遅くなっていますし、わたくしから、きっと伝えます

からと言つても何もおっしゃらないのです。ただ、重大な事かもしね、とだけしか。」と不満そうに言う。
(かも)と言う言葉が引っ掛かる。

(その六)

昼前の埃っぽい道を、中村忠介は馬に乗つて歩んでいた。影は短く陽を遮るものは何も無く、馬も嫌であるらしく、また馬上の人の氣の重いのも読んで歩みが鈍い。

昨晚、妹が語るところによると、息子の壯之介が常より早めに帰つてきた。それだけなら、あの怠け者めと言つたと想う。うだけで済むのだが、衣服に返り血らしい物が付き、刀も曇つてゐるようなので問い合わせたが、何でもないと言つたと言つた。

急ぎ壯之助を連れてこさせ、忠介自身が、思い当る事の無いと言うのをさらに問い合わせると、里で童を一人切つたと言つた。

疎い地理を想ひ巡らして御池村の事と当たりをつけ、夜が明ければすぐに、地の縁の無い者でもあり、とりあえず村の長の家へと駆け付けようとしたのだが、何とも



気が重く出遅れてしまい、日も高くなってしまった。

途切れることなく流れる汗を拭いながら、生まれ育った東国とは随分と異なる西国の夏の厳しさを呪つた。

この盆地は、夏暑く冬は寒い。気候が違うように、人

の情も随分と異なるようなどい返していた。

ひやらひやらと祭り囃子にも似た柔らかな物言いの底

に刺を隠してと、言葉は荒くとも純朴な東国の人とはえらい違ひだと、在の者と接する同輩は常にこぼしてい

る。

ふむ、それはあるなど、これから立ち向かう事態への心構えとして忠介は少しく考え込んだ。

昨夜の昇進話が、うたかたのようく消えて行く。我が

こちらの者は京・大坂の背後に控え、常に戦乱を屏風一つ隔てて見てきた。それ故、心は否であっても、口先では是と言ひながら暮らして来たのだろう、一筋縄ではいかぬような、心せねばと氣を引き締める。

が何やらしきりと、自分が見落としている事のあるような気がして落ちかなかつた。

ここは御公儀も目を光させている京・大坂も近く、それでなくとも伊賀・甲賀が近く、何か騒動が起きれば簡単抜けじや。もつと些細な事で騒動の起きたこともあるし、もつと些細な事で取り潰された御家もある。

昨夜の昇進話が、うたかたのようく消えて行く。我が

身ばかりか命に変えても大事な御家がとの思いに、何と
しても穩便に納めなくてはなるまいと強く思った。

がそれにしても、親戚に嫁いだものの義弟が早くに亡
くなつて、近頃は倫だの義理だの喧しく、二夫にまみえ
ずだとかで再縁もままならず、女手一つで子供を育てる
妹を不憫と、甥達に目に掛けたのが裏目に出たと忌ま忌
ましかつた。

いやそれよりも、もっと我が身に差し迫つた事とし
て、畿内は地侍等、百姓とも武士ともつかぬ者が多く、
その時々で形を変えて働くと聞く。

この辺の者も皆そうで、闇夜のカラスの如く、侍とも
百姓とも分からぬそうだ。

いくら刀狩りだと武器を取り上げようとしても、地に
生える雑草のごとく、しぶとく地中にくらい込み、抜こ
うとしても上辺だけで、しばらくするとまた盛り返して
くる、と生い茂つた夏草をうんざりと見やりながら忠介
は思つた。

ふと遠くの田畠で野良仕事をしている村人がこちらを

見ているような気がした。その視線が尋常で無いものの
ような気がして背筋をうら寒いものがすべり落ちた。

誰かが走つて行くのが見えるような気がした。戦場な
らさしづめ斥候だなと思つた途端、昨夜から眠りを浅く
していた不安が、形になり始めた。

地侍達は、伊賀・甲賀と言つた程で無いにしても、尋
常でない兵法を持つ者が多い。昨日の今日で、身内の者
を殺された者が待ち構えていたら……。

丈高く生い茂つた夏草のかたまりの陰に、人がいそう
な気がする。

僅かな風に翻る葉裏の白さが突きを入れてくる槍の穂
先、飛虫の羽音が矢羽根のうなりのようないがした。

しかも腰には、いつものように竹光をさしていること
に、突然気が付いた。

これでは立ち向かい様もない。問答無用と殺されて、
何處かに密かに葬られれば、自分など捜しようも無いだ

ろう。藩も突然行方知れずになつた者など、不埒な奴と
されるのがおちだと思えた。

灼熱の太陽の下で背中が異様に冷たく、氷の板を背負
つてゐるようだ。

村中に入つても、あちらこちらから刺すような視線が
感じられ、長の屋敷についた時には、疲れ果てて立つて
いるのがやつとの忠介だった。

村の長の屋敷は、まだ普請したばかりの忠介の屋敷な
ぞ比べようもない程がつしりとした造作で、通された座
敷から見える庭の木も、辺りを満たす蟬時雨を振り撒き
ながら、この地に生えた年月を物語つて大きく太い。

忠介は事あれば砦ともなりそなとまたぎくりとす
る。

薄暗い室内に眼が慣れてきた。床の間も何やら結構な
物が飾られているが、何よりも、隅居にはいわく有り氣
な槍が飾つてあるのに、目が放せなかつた。

心なしか線香の匂いが強すぎるような気がする。ひよ
つとするとこの家の子か。そう言えど、この家は名字帶
刀を許されてゐたと、またしても自分の腰の物の軽さが
悔やまれた。

仁右衛門は早朝に松吉を葬り、やれやれと寝入つた途
端、御役人が来ると村人の知らせで、たたき起された。

顔を洗いながら、別の所へ行くものでありますよう
にと念じたのも空しく、次は門前に立つては家人が知
らせてくれる。

丁重に奥座敷に通すようにと言つて、こちらも羽
織袴に改めてと、出させた衣服をまとおうとするが、ま
るで手が別物になつたかのよう着替えるのに手間取
る。女房が呆れて子供にするように着せてくれた。

仁右衛門の奥座敷の所まで歩む足は震え、こんな事で
はかえつて痛く無い腹まで探られると、座敷の前で大き
く息をしたものの、自分の胸の音を聞きながら侍の前に
座つた。

小柄で瘦せた侍は、年寄りなのか若いのかよく分から
ない。

出された茶にも手を付けず、じっと何かを見ている。

その視線を追って、鴨居の槍を見ていることに気が付

いた仁右衛門は小さく声を挙げてしまった。

名字帶刀を許されて、先祖伝来使っている名字は今更
とおおっぴらに使っているが、刀は今時わざわざさして
歩く者はいない。まして槍なんぞ、こんな所に掛けて置
くのではなかつた、何と申し開きしようかと、挨拶の言
葉もしどろもどろであつた。

この家の主で米山仁右衛門と名乗つた大きな男の前
で、中村忠介は膝の上の手の震えを必死で押さえてい
た。相手は忠介なんぞ、押し潰してしまいそうな程、大き
く見える。

なんとか時候の挨拶をしたものの、相手が何と返事し
たのかも、覚えていない有様で後が続かない。

襖の後ろで人の気配がするようでもあり、いつ切り込
んで来るかと、冷汗の途切れる間も無い。

一体何をどうしていたかも定かでない、悪夢の中にい
るような心持ちで半刻も過ごした頃、突然、寺の鐘が正
午を告げて、ごんと鳴ったのに驚いて、文字通り飛び上
ったのを、相手は帰る気配と見て送ろうとする。その時
になつて、肝心の事を言ひそびれているのに気が付き、
忠介はかすれた声で言ひ始めた。

「実は、拙者の甥の壯之助という者が、この辺りで童を
一人…。實に短慮の者にて…。」

舌が喉に張り付くようでは声が出ない。が仁右衛門は確
かにうむと深く頷いたよう見えた。家人も近づいて來
て、見送ろうとする。そのまま玄関先まで出てしまつて、
せめてもと万感の思いを込めて一礼をした。後を恐れる
かのように、馬にしがみつき振り返りもせずに馬を走らせ、
ようようの思いで帰り着き、余りの顔色の悪さに驚
く妻に、暑氣当たりだと苦しい言い訳をして、床に横に

なつてしまつた。

うまくいったかどうか気にはなるが、仁右衛門の領い
たのを頼みに、うまくいったのだと、強いて自分に思い
込ませようとした。

仁右衛門は皆が集まり、物騒な事を言つていたのを、
咎められるのかと、何と言ひ訳しよう、と、生きた心地も
なく、中村忠介と名乗る侍に前に座つていた。

相手は、侍らしく寡黙で、仁右衛門もそれが習い性と
なつて寡黙であつたから、ただ、しんと向かい合つてい
るのみであった。

それだけに相手が帰る際に漏らした言葉は意外すぎ
る程で有り、腰が抜けほど安堵した。女房が口やかま
しくあれこれ聞いてくるが、話してやる事が元々少な
く、その不満そうな視線から逃れるように、自分から用
事を言い出して野良に出た。

